

2年A組 職業基礎（接客・マナー） 学習指導案
平成25年11月25日（月） 第2校時 10:00～10:50 会議室
指導者 岸本 和美

1 題材名 「聴くスキルを伸ばす」

2 題材設定の理由

(1) 生徒観

本学級は福祉コースに4名、流通サービスコースに6名が所属する合計10名の生徒で編制されている。専門コースの授業は週に2日間あり、同じコースに所属する生徒は、毎日ほとんど全ての授業を一緒に行っている。どの生徒も落ち着いて学習に取り組むことができ、課題に対して自分なりに取り組もうとする姿勢がみられる。

コミュニケーション面については、日常生活の中では音声言語でのやり取りが中心で、個に応じて状況に差はあるが、自分の興味関心のあることは自由に流暢に話すことができる。一方で、興味のないことや目の前にいない相手の考えていることを聴くことは難しく、相互に自分の好きなことを言い合って嘯み合っていない会話をしていたり、共通する話題がないと会話が続かないためコミュニケーションをとること自体をあきらめたりする生徒もいる。

会話は、聴く側の励ましや興味を向けているというプラスの反応により、話し手との間で相互に行うことばのやり取りである。本学級の生徒にとって、一度に複数のことを同時に処理する会話は、非常に難しいものである。卒業後は一般の事業所に就職することを目指している生徒たちであるが、これまでに行ってきた現場実習先で休憩時間の会話が課題となっている者も多く、苦手意識をもって緊張したり、話さないといけないと思って必死に話し続けて疲れたり、苦勞している様子が見られる。見えないことの理解が難しい生徒が多く、話の内容についてイメージをもって聞くことに困難があるため、相手の話していることを聞いて、内容に応じて応答をすることはとても難しい。また、他者の行動を見て自分に取り入れて実行するということが不得手としている生徒が多く、会話の場面でも相手を見る、うなづく、相槌や反応のことばを返すといった聞くためのスキルは十分に身につけておらず、その習得は共通する課題である。

(2) 題材観（題材設定の理由）

職業基礎（接客・マナー）の授業は、主に社会人としてのマナーを扱っている。本題材の「聴くスキルを伸ばそう」は、カウンセリング技術の一つである「傾聴」の一部を取り上げたものである。最近では、円滑なコミュニケーションや対人関係をねらいとして、マネジメントやコーチング等の研修会、また、生徒を対象として高等学校や中学校などでも取り入れられるようになっている。

コミュニケーションは、「聞く」「読む」という情報や意見などを取り込む作業と、「話す」「書く」という情報や意見を発信する作業とから成り立っている。コミュニケーション能力を高めていくには、この4つを総合的に身につけていくことが必要になる。アメリカの心理学者、V. スミスの調査によると、私たちが日常生活においてコミュニケーションに費やす時間は、「聞く」という割合が45%にもものぼるといふ。

本題材は、コミュニケーションの重要な要素である「聞く」について取り上げ、生徒たちが習得可能な「聴く姿勢」について自分の体験と照合しながら対人面での適切なコミュニケーションをについて学ぶために設定した。

相手がどう感じるかを考え、どのように反応を返せばよいかを瞬時に判断しながら会話をつづけていくことは、障害特性からも難しい生徒が多い。しかし、生徒たちが、本題材を通してどのようなふるまいをすればよいかを知り、それを実践できるように学習することで、相手に不快な印象を与える場面が減り、会話が続く可能性を高めることができると考える。

また、昨年末から今年一学期にかけて行ってきた接客の学習においても、マニュアルの通りに繰り返しロールプレイで練習してマニュアルの内容が十分に身についた生徒は、反応方法や状況の理解の仕方、目の配り方などが分かり、応用して臨機応変な対応がとれるようになった。このことから、スキルを身に付けた後は、実践の場でも臨機応変な対応ができるようになることが期待できると考える。生徒によって個人差があるが、会話の場面で、どのようなふるまいをすればよいかを知り、実践できることは、就労を継続するための力にもつながるのではないかと考え、本題材を設定した。

(3) 指導観

本学級の生徒たちの学習活動の様子を見ると、話を熱心に聞き、課題には真剣に取り組み、ノートやワークシートなどに集中して記入している。ところが、重要な内容について質問をしても答えられなかったり、既習事項を次時に尋ねても覚えていなかったりすることがよくみられ、聞くことが中心の活動では本当には理解できていないことがある。本題材の指導に当たっては、生徒が聴くスキルを個に応じた身に付けるために、指導の段階を細分化し、模擬体験をしながら学習を進めるようにしたい。それは、活動を通して進めることで、生徒の理解の状況や実践できる力になっているかどうかを確認できるからである。長い説明は理解につながりにくいため、絵などにして視覚的な手がかりを提示し、シンプルに短い時間で理解できるようにする。生徒たちが全般に語彙の少ないことに配慮し級友の発言を手がかりにして自分の考えを言語化できるようにする。他者の考えを取り入れながらも自分にできることは何かを考え、実践につなげられるように練習の場を設定していくようにする。

これまでの指導においてはエゴグラムや得意・不得意リストの作成、良いと思うところ探し、チェックリストによる相互評価など、生徒自身が自分自身について自他の

両方から知る内容を取り入れてきた。この他、職業にかかわる学習を中心として、自分自身を振り返る機会を多く設け、肯定的な自己理解を深めてきていたり、国語や保健体育の授業の中では、他者との比較で客観的に捉えられるような指導も行ってきたりしている。

これらのことから、生徒は自分自身の特徴をある程度理解し、生活上の困難を改善・克服しようとする意欲が見られるようになってきている。今回の授業では、自分が実践できそうな「聴く姿勢」を考えることがそれにあたると考えている。

(4) 自立活動の指導について

今回の自立活動推進事業における公開授業を実施し、本校における自立活動の指導の在り方を検討するため、本校で各教科等を合わせた指導として位置付けている「職業基礎（接客・マナー）」の授業を取り上げることとした。そして、「職業基礎（接客・マナー）」で扱う本題材の指導計画とともに、自立活動についての個別の指導計画を作成し、指導目標や指導内容を明確にししながら、自立活動の指導を行うこととした。その指導についてのあり方や効果を検討するため、今回は対象生徒を1名に絞って、自立活動についての個別指導計画を明確にししながら、指導を行うようにした。

今回対象とした生徒Gは、中学校から特別支援学級（知的）に在籍している。真面目で何事にも一生懸命に取り組んでいたが、学習の理解と積み上げが難しく、失敗体験が多く自己肯定感が低かった。また、中学校のときに本人がいじめと感じるようなかわりがあり、深く傷つき、他者とかかわることに強い不安感を持って本校に入学してきていた。視線を合わせることに苦手意識が強く、顔をあげて相手を見ることが難しかったり、級友に気を遣いすぎてへとへとになり授業に取り組むことが難しくなったりすることがあった。また、親しくなった相手が不機嫌でいると自分の言動が原因に違いなと思い込んで不安になるなど、対人面でのやり取りが分かりにくいために、過剰な反応を示すこともあった。このような場面では、必要に応じて、生徒Gの話を教師が聴いて整理し、対処法の提案と併せて本人にフィードバックするなどして、自己理解を進める支援を行ってきた。これにより生徒Gは、信頼できる大人に相談すればよい解決の方法が見つかるようになるようになり、自分から相談することもできるようになっている。

本題材では、聴き手の態度について通常では言葉にしない印象や、感じたことを言葉にして説明する場面を多く設けている。このことを実際に聞くことで、他者の考えを知ることができるので、Gには捉え方や考え方の幅を広げる自立活動としての必要な指導の機会になると考える。このことから、今回Gを対象として、合わせた指導として行う本題材におけるGの自立活動の指導を行うこととした。

3 題材の目標

- ◎ 対人面での適切なコミュニケーションを行うために、「聴くこと」が重要な要素の一つとなることに気づくことができる。
- ・ 「ストローク」について知る。
 - ・ 「聴く姿勢」について知り、実践できる。
 - ・ 「聴かない姿勢」が相手にどのような印象を与えるかを知る。
 - ・ 自分が実践しようと思う「聴く姿勢」を具体化し、実践できる。

4 指導計画（全4時間）

- 第1時 プラスのストロークとマイナスのストロークについて知ろう
 第2時 「聴く姿勢」で聴いてみよう
 第3時 「聴かない姿勢」が与える印象と、「聴く姿勢」について考えよう（本時）
 第4時 「聴く姿勢」を実践して、よい聴き手になろう

5 題材に関する個別の実態と目標

生徒	題材に関する実態	本時の目標
A 男	頷きや視線を合わせることはできるが、音声言語で言葉を返すことが難しい。自分にできることは何かを考えて、行動を工夫する場面が出てきている。	・ 「聴く姿勢」として、3つ以上の反応の言葉を挙げることができる。
B 女	「聴く姿勢」は自然にできており、相手からは話しやすい印象をもたれることが多いが、本人は自覚がない。	・ 行動と印象との関係を具体的に知り、自分が取っている行動が相手に与えている印象について自覚できる。
C 男	視線を合わせたたり、話している相手の方を見たりすることが苦手で、話に集中はしていても、下を向いているため聴いているようには見えないことが多い。	・ 自分の行動が「聴かない姿勢」として相手に伝わっていることを知り、話し手の方に視線を向けるための工夫をすることができる。
D 男	相手の話に耳を傾けることはできるが、視線や体を向けたり、頷きや相槌の言葉をかけたりすることは難しく「聴く姿勢」は取れていないことが多い。	・ 自分のとっている行動が「聴かない姿勢」として相手に伝わっていることを知り、「聴く姿勢」をとろうとすることができる。
E 男	視線を合わせたり、話している相手の方を見たりすることが苦手で、親しいごく一部の相手以外には、頷きや返事などの反応を返すことも少ない。	・ 自分のとっている行動が「聴かない姿勢」として相手に伝わっていることを知り、自分のできる「聴く姿勢」をとろうとすることができる。

F 男	慣れた関係では、「聴く姿勢」でやり取りができるが、実習先や緊張した状態などで、うまくいかないことが自覚できている状態では、話し手の方に向いたり、反応を返したりすることが難しい。	・気分が落ち込んで切るときには「聴かない姿勢」になっていることに気付き、意図して「聴く姿勢」をとることができる。
G 男	相手の方を見ることは意識して少しずつでき始めているが、視線を合わせるのが苦手で、特に慣れない相手にはうつむきがちになることが多い。 相手のことを気遣うが、相手にどのように捉えられているのかが分かりにくく、自分の言動が相手の気分を害したのではないかと必要以上に気遣ってしんどくなり、自分の言動に不安を感じることがある。	・自分が取った「聴かない姿勢」の態度と印象について知り、相手がどのような部分に注目して、その印象を持つのかに気づくことができる。 ・自分ができそうな「聴く姿勢」について考え、実践することができる。
H 女	慣れて親しい関係では「聴く姿勢」が取れるが、実習先や慣れない関係の人とのやり取りでは、どのような反応をしてよいのかが分からず、反応の言葉が出なかったり、緊張して固くなったりする。	・緊張している時の反応が相手に「聴かない姿勢」として伝わっていることを知り、意識して「聴く姿勢」をとることの大切さに気付き、実践することができる。
I 女	相手の話を聴く場面では、相手のほうを見ない、返事や頷きなどの反応を返さない、キョロキョロしたり不要なものを触ったりするなど、「聴かない姿勢」をとっていることが多い。	・自分が取った「聴かない姿勢」の態度について知り、日頃の姿に気づくことができる。 ・適切な「聴く姿勢」を上げることができる。
J 男	相手の話を聴くときに、集中して最後まで聴くことが難しく、途中で自分の話題に変えたり本筋とは違う部分に反応して話に介入したりすることがある。	・自分が取った「聴かない姿勢」の態度と印象について知り、日頃の姿に気づくことができる。 ・自分にできる「聴く姿勢」を上げることができる。

6 G男の自立活動についての個別の指導計画

(1) 実態

新しいことに対して抵抗感が強く、無理だと感じて自分では挑戦することが難しい面がある。予め分かっていることや、支援を受けながら練習することで実際にはできることが多い。対人関係を結ぶことに苦手意識があり、また、慣れない人が複数いるところ

では、緊張が強く、不安になる。自分の考えを整理したり、表現したりすることは苦手である。

(2) 自立活動の指導目標

他者のアドバイスを取り入れて自分の考えを整理し、正しい選択をすることができる。

(3) 具体的な指導内容

- ・ 教師との話し合いによる、自分の考えの整理と気持ちの表出。
- ・ 新規なことに対する不安を取り除きながらの体験の拡大。
- ・ 得手・不得手に関する客観的な判断。

(4) 本時における自立活動の実態と指導内容

- ・ 級友とのやり取りは、何を話したらよいのか分からない、どのようなふるまいをすればよいのか分からない、どのように反応を返したらよいのか分からないなど、分からないことが多く、教室で自分から話しかけたり、自分から会話の輪に参加したりすることはあまりない。また、話しかけられたときには、会話が続き苦笑いしていることが多い。指導に当たっては、「聴く姿勢」をあらかじめ情報提供していること、ロールプレイという決まった枠組みの中で、練習することで聴き手の役割はほぼ果たせるようにする。また、自分が実践したい「聴く姿勢」のはどのようなものかを考えることで、主体的に取り組むことにつなげられると考える。次時に繰り返し練習することで、より実践する力につなげられると考える。
- ・ 他者のアドバイスに当たる部分は、「聴く姿勢」についての情報、生徒が発言する感想や、話し合いの際に出てくる発言、まとめの時の意見など。これらを取り入れた上で、自分はどのようにふるまうかという自分の考えを整理し、正しい選択をすることにつなげられると考える。

(5) 本時における自立活動の目標

- ・ 自分が取った「聞かない姿勢」の態度と印象について知り、相手がどのような部分に注目してその印象を持つのかに気づくことができる。
- ・ 自分ができそうな望ましい「聴く態度」について考え、実践することができる。

(6) 本時における自立活動の目標を達成するための支援

- ・ 学習に集中しやすいように、緊張をほぐし、意見が言いやすい雰囲気を作る。
- ・ ロールプレイで反応の言葉や態度について示すことで安心して取り組めるようにする。
- ・ 感想を述べる場面では、他者の感想を聞いてヒントを得てから発言できるようにする。
- ・ グループでの話し合い場面では、記入したワークシートを見ながらできるようにすることで、やり取りが見えるようにする。
- ・ 板書を手がかりに、自分にできそうな「聴く姿勢」を選択できるようにする。

本時の目標と展開 (第3時)

目標	学習活動	教師の支援及び配慮事項	評価の観点	6 男の自立活動についての個別の指導計画 (5) 本時における自立活動の目標 参照
<ul style="list-style-type: none"> 自分の「聴かない姿勢」が相手にどのような印象を与えるかを知る。 自分が実践できる「聴く姿勢」について考えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> アイスブレイクを行う 	<ul style="list-style-type: none"> 雰囲気や和らげ、その後の展開への一体感を作るとともに、ディスプレイのきつかけとなるように留意する。 展開につながるアクティビティを行うことで、授業内容に取り掛かりやすくする。 	<p>評価の観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 姿勢とストロークを実践できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 慣れない場面や、対話の場面では緊張しやすく、自分の考えを発言するなどが難しいことが予想される。学習に集中しやすいうように、動きのあるアクティビティを行うことで緊張をほぐし、意見が言いやすい雰囲気を作る。
<ul style="list-style-type: none"> 前時の学習内容を確認する。 「聴く姿勢」とはどのようなものか、具体的にあげる 	<p>「聴く姿勢」について、前時の学習内容を想起する</p> <ul style="list-style-type: none"> 「聴く姿勢」について前時に提示したスライドを示して発問し、生徒の発表から前時に学習したことを確認する。 姿勢、目線、表情、ストロークについておさえる。 忘れていたことが予測できる生徒や何をどのように発表すればよいか分がかりにくい生徒には学習に参加しやすくなるよう後で指名する。(C男E男F男H女) 	<ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」は、どのような印象を与えるかについて知る 「聴かない姿勢」を実践させることで、どのようなものを意識できるようにする。 自分から話すことの苦手な生徒が話せるように資料を示しながらテーマを決める。(A男C男D男E男G男I女) 話し手は、提示されたテーマについて2分間話をする。聴き手は「聴かない姿勢」をとる。 聴き手には、自分がとる行動を意識できるようにワークシートに示す。 話し手には、具体的にどの姿勢がどのような印象を与えるのかを言葉にして表現できるように発問する。 言葉が弾かびにくい生徒には、他の発言を参考にできるよう指名順を後にする。(①E男②C男③I女④A男⑤G男) ipadで会話の様子を撮影し、画像を見ながら話し合いができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」を実践することができたか。 話し手としての印象を言葉にして答えることができたか 態度と印象を対応させて、ワークシートに記入できたか ルールを守ってipadの使用ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時の学習内容を忘れていたり、何をどのように答えればよいのか分がかりにくいことが予想されるため、数名の生徒が発言した後で指名する。
<ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」の印象について知る 2人組になり、話し手、聴き手役に分かれて会話をする 2分後、聴いてもらえなかった感想を述べる 各自で「聴かない姿勢」で感じたことをワークシートに記入する 役割交替し①②③④⑤画像とワークシートを対応させて印象について話し合う 	<p>「聴かない姿勢」は、どのような印象を与えるかについて知る</p> <ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」を実践させることで、どのようなものを意識できるようにする。 自分から話すことの苦手な生徒が話せるように資料を示しながらテーマを決める。(A男C男D男E男G男I女) 話し手は、提示されたテーマについて2分間話をする。聴き手は「聴かない姿勢」をとる。 聴き手には、自分がとる行動を意識できるようにワークシートに示す。 話し手には、具体的にどの姿勢がどのような印象を与えるのかを言葉にして表現できるように発問する。 言葉が弾かびにくい生徒には、他の発言を参考にできるよう指名順を後にする。(①E男②C男③I女④A男⑤G男) ipadで会話の様子を撮影し、画像を見ながら話し合いができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」を実践することができたか。 話し手としての印象を言葉にして答えることができたか 態度と印象を対応させて、ワークシートに記入できたか ルールを守ってipadの使用ができたか。 	<p>相手がどのような部分に注目して、その印象をもつのかに気づくことができる</p> <ul style="list-style-type: none"> 物事を具体的に捉えたり、考えたりすることを不得手としているために瞬間的な印象や、部分的な一部の情報から良い悪いの判断をしてしまう面があり、不安を強く感じてしまう。具体的に捉えることで、対処できるとに気づけるようにする。 「～が…に感じた」という答え方の枠組みを提示し、よくない印象には根拠となる態度があることに気付けるようにする。 他生徒が発言したことをフィードバックして伝え、整理しやすいうようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」をどのように修正すればよいかについて考えることで望ましい「聴く姿勢」についての考えがまとめられるようにする。 G男とのかかわり方に慣れ、意見を言いやすいうように促したり発言に対して即座にプラスのフィードバックを返したりすることができると同じグループにする。 自分の意見が適切であるかどうか不安に感じて、発言を躊躇する様子が見られたときには、ワークシートに記述している内容を評価して、自信をもって意見が言えるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> どのような「聴く姿勢」がよいかについて考える 5人組になり、「聴く姿勢」と「聞かない姿勢」についてまとめる グループ毎に発表する 	<p>「聴かない姿勢」と「聴く姿勢」との比較により、望ましい「聴く姿勢」とはどのようなものかについて考える</p> <ul style="list-style-type: none"> グループごとでまとめるよう伝え、5人がまとまって話し合いができるように役割分担をする。(①A男B女E男G男H女、②C男D男F男I女J男) ワークシートの書き順に従って整理できるようにする。 出てきた意見を共有し、捉え方や考え方を広げられるようにする。 発表の仕方についての枠組みを示し、何をどのような順番で言えばよいかわかるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「聴く姿勢」について自分の意見をいうことができたか。 	<p>話し合いの中で出てきた「聴く姿勢」の中から、どれが自分が実践可能かを考えることができる</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が実践したいと考えたことを、個別に訪ねて言語化することで、実践しようとする意欲を高める。 本人が決めたことを受容し、実践につながるよう助言や励ましを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」をどのように修正すればよいかについて考えることで望ましい「聴く姿勢」についての考えがまとめられるようにする。 G男とのかかわり方に慣れ、意見を言いやすいうように促したり発言に対して即座にプラスのフィードバックを返したりすることができると同じグループにする。 自分の意見が適切であるかどうか不安に感じて、発言を躊躇する様子が見られたときには、ワークシートに記述している内容を評価して、自信をもって意見が言えるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> 振り返りとまとめる 	<p>自分自身ができそうな「聴く姿勢」について考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分はどのような「聴く姿勢」を実践したいかについて、ワークシートに記入する。 次回は、今日考えた「聴く姿勢」をロールプレイで練習することを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分が実践する聴く姿勢を挙げることでできたか 	<p>話し合いの中で出てきた「聴く姿勢」の中から、どれが自分が実践可能かを考えることができる</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が実践したいと考えたことを、個別に訪ねて言語化することで、実践しようとする意欲を高める。 本人が決めたことを受容し、実践につながるよう助言や励ましを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「聴かない姿勢」をどのように修正すればよいかについて考えることで望ましい「聴く姿勢」についての考えがまとめられるようにする。 G男とのかかわり方に慣れ、意見を言いやすいうように促したり発言に対して即座にプラスのフィードバックを返したりすることができると同じグループにする。 自分の意見が適切であるかどうか不安に感じて、発言を躊躇する様子が見られたときには、ワークシートに記述している内容を評価して、自信をもって意見が言えるようにする。

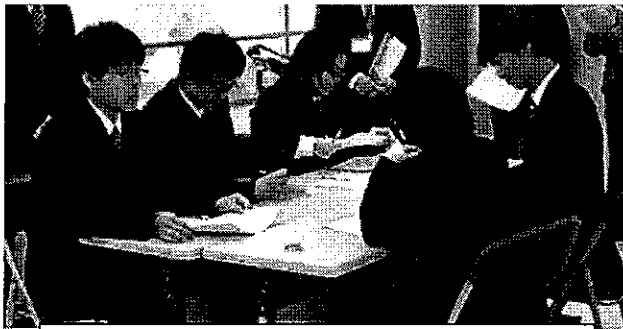


図1 学習活動4 グループでの共有

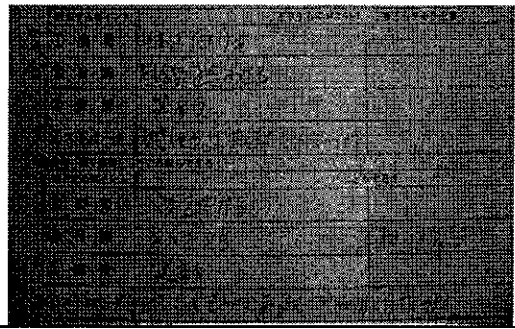


図2 学習活動5 生徒Gのワークシート

IV 成果と課題

(1) 生徒Gの自立活動としての成果

聞く態度と印象については、相手の具体的な態度に注目できるよう、「姿勢」「目線」「表情」「ストローク」という項目を立てて考えるようにした。その結果、具体的な態度と印象について「嫌な感じ」「聞いてもらえていない」「悲しかった」などのことばと結び付けて理解することができたようだ。ワークシート（図2）の上段左端に、気になる順番を数字でランク付けしているように、自分自身はどこが気になるのか、グループの仲間はどこが気になるのかということが話し合い活動の中（図1）でできていた。また、iPadで聞いているときの姿勢を撮り、ペアの生徒と話し合いをすることで、自分の姿が相手に与える印象について客観的に捉えることもいづらかできたようである。自分ができそうな望ましい「聴く態度」については、ワークシート（図2）にある通り、グループでまとめた「目線を合わせる」を「口元を見る」「相手を見る」に変えていたり、ストロークに「うなづく」を加えていたり、自分が実践することをイメージして現実的に考えることができ、実践練習でも行うことができていた。これらのことから、生徒Gの自立活動の目標は達成することができたと考えられる。

(2) 集団を対象とした授業の中で自立活動として取り上げたメリットとデメリット

自立活動は個別の実態からくる課題のもとに、個に応じて指導するものである。その本質を踏まえつつ本校では、集団での指導において自立活動を指導する場合の形をいくつか模索しながら検討しているところである。今回のような内容の場合、以前は全体が同じ目標に向かっていたが、今では「他の人にはできるが自分にはできない」「相手の感じる距離感、ここまではよい」と、自分と他生徒との違いがどの生徒も分かってくる。「自分としてはここまでできる」が最後のワークシート（図2）だった。少しずつ身につけてきている部分である。本校の生徒の場合、スタートはマニュアルに沿っての理解や実践だが、その後、自分は「ここをがんばる」というそれぞれのステップになっている。この部分が自立活動の目標と重なる部分ではないか考えている。また、経験や学習の積み重ね等により他者との比較で自分自身のことに気付くことができたり、他者の考え方を知ることによって自分の言葉を増やしたり考え方を広げたりすることにつながっている。一方で、本学級の生徒たちには、実際の状況と切り離されていたり、時間差があったり、臨場感がなかったりすると、理解につながりにくい特徴がある。この部分については、学校生活の様々な場面で配慮的に指導が行われていたり、状況に応じて指導がなされていたりすることも多い。これらの指導の積み重ねの中で、生徒は徐々に自己理解を深め、提示されたモデルを取り込みやすくするというところまで行っている。このような特徴から、取り出した個別指導の場面で自己理解や他者理解、コミュニケーションといった内容を指導していくことは難しい面がある。その一方で、感情教育など極めて個別なことを扱う場合には、集団での指導場面では、個に応じた指導は困難な場合もある。また、取り出した指導場面でも前述の通り困難な面があり、十分な指導はできにくい。知識としての、ことばを教えることを意図して行うことは可能でも、個々の感じ方捉え方に応じて教えることが必要な内容は、日常生活の中で意識して指導していくことも重要であると考えられる。

これらのことから、本校の生徒への自立活動として、生徒の実態に迫る内容を指導する際には、本人の実態から導かれる指導内容と、指導の場面や形態を効果的に組み合わせることが必要であり、本人の実態を十分に把握しておくことが重要であることが分かった。

平成25年11月25日

<質疑応答より>

- ・全員が必要とする内容であった。
- ・全4時間計画で、次時で終了となる。授業が進む毎に、少しずつ学習が積み重なって、授業以外の場面でも生かされている。
- ・本校では特設の自立活動の時間はない。職業基礎（接客・マナー）で合わせて実施している。自立活動の内容をふまえて「人間関係の形成」（特に自己理解）「コミュニケーション」に重点を置いて指導を行っている。職業の狙いもある。

<質疑応答・感想>

- ・「聴く」ことの指導と「話す」ことの指導を同時に行うことは難しい。立場が変わると視点がずれてくる。今回のように一つ一つ立場を区切って行う方が効果的である。
- ・「ストローク」とは、要するに反応を返すこと。自分が発信する際には一方的になりやすく、相づちや反応を返すことに意識が向きにくい。
- ・職業基礎（接客・マナー）の授業は、職業基礎の指導内容表の中から「自己理解」「職業選択」に焦点を当ててもってきたものである。「自己理解」も色々あるが、職業の「自己理解」だけでなく、自分自身への「自己理解」も含めている。休憩時間における職員とのやりとりなど、実習先で課題となってくることが多い。
- ・自分自身が相手の話しを聴く姿勢、聴いているサインを出せることも大切である。「自己理解」をするために、「他者から評価を受ける」「他者によって自己理解を深める」という観点も大きい。
- ・以前は全体が同じ目標に向かっていたが、今は「他の人にはできるが、自分にはできない」「相手の感じる距離感、ここまでなら良い」と、自分と友だちとの違いが分かってきた。スタートはマニュアルに沿って行うが、その後、自分は「ここを頑張る」というそれぞれのステップになる。
- ・「聴いてくれない体験」はマイナス体験・傷つく体験であり、自閉症スペクトラムの生徒は、マイナスの体験を処理しにくい。行動の受け取り方として、体験しないと「不快」は分からないが、プラスの体験の方が身につきやすい。本時の内容として、不快体験をさせたまま終わるので、2時間続きの授業にし、上手くやれた体験で終われば良かった。
- ・ペアワークの入れ方は難しい。何でも最初から正解を見せてやらすだけではなく、マイナス体験やもやもやを言語化していくことも大切である。
- ・「分かりました」と知識として入っていても、それが行動に現れないことが多い。体験を通してできたこと以外は理解になっていない。本時では、できるだけ説明を少なくし、生徒から出たことを返すようにし、体験を重視した。
- ・気持ちを温度計で示すのは難しい部分もあった。「イライラした」という生徒のその時の気持ちを生徒が「上がった」と感じた時、それが「気持ちが上がる」とは少し違うことを説明するのは難しかった。本時では、一斉指導として統一した感情のメモリを使用していた。一斉では難しく、生徒によって個別でやらなければいけない内容である。
- ・出てきた言葉の中に「うざい」「イライラ」があった。生徒は一括りにして使っていることもある。違う言葉に代えていくのは丁寧に扱うべきところで、個別の対応が必要である。

- ・自立活動は全員にしないといけない指導である。最初から集団として指導する場合の形をいくつか模索しながら提案しているところである。
- ・ソーシャルスキルでは、パターンでやりとりを教えていくのでは、一律的な判断になってしまう。「自分ならこうする」というのが自立活動の部分だと思う。
- ・メタ認知。自分を知るのは非常に難しい。倉敷琴浦高等支援学校では性教育の中で自己認知について学習をしている。感情を上手く表現できなかつたり、相手の心の動きを読み取れなかつたりすることで、トラブルが起きることが多い。
- ・自立活動は一般校から来た教員にとっては認識が低い。道徳教育とリンクさせて考えても良い。言い回しが違うが、やっていることは同じことも多く、自立活動の文言に置き換えて考えられる。一般校でやっている指導を生かしていく。
- ・感情の言葉を教えるのは難しく、授業など別の場面で切り取って教えていく必要がある。その場その場でぴったりくる言葉を与えていくことで、生徒の中にその言葉が入っていく。生活の中で感情の言葉を得ていくが、知識としての感情の言葉は事前に教えておくと、使えることもある。

<指導講評>

- ・集団での自立活動は初めての取り組みであった。「集団の形をとっていても自立活動の学びができる」というのが感想。しかし、自立活動指導要領解説を読んでも、「本来は一人一人に目標がある」と明記されている。本授業の指導案にも、個々の目標があった。授業後、個々に合った押さえがないと、自立活動として成立しない。
- ・本生徒たちは、傍から見ると知的には高いと見られているが、個々に見ると、それぞれ障害特性があり課題がある。集団の形があっても個のめあてがあり、最終的には個々のめあてに向かっている。
- ・岸本Tがやった授業が、学年、学校全体に共通理解が図れるか、が大切である。図れないと日常生活で生かせないし、個々に押さえられない。これから後、日々の学習活動で押さえるところを確認してほしい。集団と個と両方の視点をもって取り組んでほしい。

<補足>

・今回の公開授業をするに当たって、本校で教科等を合わせた指導と位置づけている「職業基礎（接客・マナー）」において、自立活動をどのように押さえ、指導すべきかを考えた。まず、学習指導案にどのように示すかが課題となった。「職業基礎（接客・マナー）」の指導内容には、コミュニケーションや人間関係の形成と関係するものが多い。しかし、それらは、生徒一人一人に対応した自立活動の指導内容とは違う。そのため、「職業基礎（接客・マナー）」の学習指導案を作成することを前提とすることとした。その上で、個々の生徒に対する自立活動における個別の指導計画を作成し、自立活動としての指導目標と内容を明確にするようにしようと考え、試行的に今回の学習指導案を作成した。本来は、生徒一人一人の自立活動の指導計画が示されるべきだが、今回のやり方では、膨大な量になることから、対象生徒を1名に絞って作成してみた。学習指導案での示し方や指導内容の設定の仕方は、今後の課題と考えている。各教科等を合わせた指導における自立活動の指導の学習指導案での示し方など、今回の授業が、他校でも検討してもらおうときの材料になればと考えている。